

## 書評

バンケット博士著 Vimuktimārgad hutagananirdeṣa.  
(Delhi University Buddhist Studies No. XXX, 123pp.  
Bombay : Asia Publishing House, 1964. Rs. 25.)

佐々木現順

パーリ原始經典及びその教義がチベット文獻の上に、翻譯或は註釈書として、伝承せられているということは、殆んど皆無といつてよいほど稀れである。チベット訳が北方所伝に限られていることが多く、従つて、南方所伝のパーリ諸經典との經典史的思想的交渉の問題はまだ未踏査の領域である。ただ諸註釈に散見する思想の断片によつて、或る程度、両者の比較研究を可能にさせる資料は存する。けれども、文獻的に両者の比較を可能ならしめる資料は先述の如く、極めてまれである。

以上の如き、原始仏教研究の現段階に於てバンケット博士の該著は極めて重要な文獻の一つを呈示する。

既に該書の校訂出版は、パーリ教義との比較に於て、私は一九五八年日本より刊行した。(拙著「ウパティッサ解説道論」法蔵館京都)。拙著は当時在印してゐた關係でバンケット博士の懇誦で、彼の集た諸資料及びその後、在独中に得たる諸異本とを対照し、パーリ教義との比較と全訳校訂を企てたものであつた。従つて、バンケット博士も自著の序文に述べてゐる如く、彼の今回の出版にも私も若干の協力をなし、二人で該書を別々の

方法を以て出版する予定であつた。彼のすすめで、先づ私が出版した。従つて、バンケット校訂本になきパーリ教義及びドイツでえた異本等の追加は前記拙著の中に入れられ、バンケットはその代り該書で別の方法を以て、この形に出版した。彼の著書には協力者としての私の責任も数多く挿入されているが、その業績の中、いくらかの誤解あれば私自身の責任であらうと考える私の校訂本に就いては A. Wayman の書評がある (The Journal of American Oriental Society, Vol. 79, No. 4, 1959)

バンケット博士は原本をサンチネケータン大学より得て以来(一九三三)、そこに見出されを領陀品以外の大乗諸經典より挿入箇所疑問を持ち、再後、五種の異本を照合討究して一九六五年漸く出版の日を見たことである。異本照合の結果ワシントン版(W)が最も信頼のおける異本であり、アディアル図書館蔵ナルタン版・及びサンチネケータン図書館の二版は諸種の点で信頼すべきものでなく、他方ベルリン州立図書館蔵の異本は屢々その読方に於て参考となる箇処の多いことを見出した。私自身の用いた異本は以上五種に、ベキン版とミュンヘンのラサ版の二種を加へて七種であつた。特にラサ版はバンケット博士の校訂後、デリー大学も入手したものであつたが、博士は二三の箇処以外、この版を用いられた。

大乘諸經典の挿入に関する問題について、博士は漢訳解脫道論に見られない次の諸經典を指摘してゐる。即ち Arhaviniscaya, Vradattapariprecha, Āryavimalakṛti-nirdeṣa, Satyaparivarta, Vicikitsa-sukhamhana, Sūryagarbha-parivarta,

Akṣagarbha なる七種の諸経典である。これらのものは本文たる道論に何らの関係もない。然し、これらはその原典の完全な形を欠いたもので、原典の断簡である。このことは梵文原典に於て、名目だけが引用されていることで知られる。その多くは、しかし、チベットめび漢訳経典に見られる。校訂者はその各経典をチベットより、パーリ及び梵文を復元し、更に有益な研究を附加している。この研究の一部分 (appendix II) は、大乘文獻の中で散逸していて、而も完全には伝っていない諸章節を研究せんとする諸学徒にとつて重要な意味を持っている。

解脱道論及びそれにふくまれている頌陀品の著造論者及びチベット・漢訳者に関しては、ババット博士の学説は最も詳しく信頼すべきものである。彼は既にその著 "Vinūtiṅga and Visuddhimaga" に於て 'Nānamoli の意見と相違した研究を發表している。ここでは更にチベット訳・漢訳者の問題を論究している。解脱道論はウパティッサを造論者とするが、漢訳の原典は存しない。漢訳者は Saṅghata (Saṅghabara, Saṅghavarman) であると言われている。漢訳者は Guṇabhadra の弟子で、六十五才で五二〇年没とされるが、漢訳は五〇五・五二〇A・Dの頃、中国でなされたということが博士によつて考証せられている。この原本は博士によれば A、D、一、二世紀頃、南インドのウパティッサ (Uṇṭissa, Uṇṭiṣya) によつて書かれたものである。そのセイロンに於ける伝承について言へば、仏教研究のセンターであった無畏山住派 (Abhayaśīlī) によつて承けつがれた。この派は衆知の如く、大住派

(Mahāvihāra) のライバルで多くの教義で後者と一致していないところを持つていた。現存している重要な諸論書たる Atthasālinī, Abhidhammatāra, Paramattha-manjūsā, Abhidhammatha-saṅgaha, Vibhāvanī は大住派に属し、更に又仏音、ダンマパーラ、ブッダゲッタなる大住派家も共にこの派に所属している。この点から見て、解脱道論が該派のライバルたる無畏山住派に属している点で、パーリ仏教伝統の中に於ける興味ある対論の確実資料である。例へば博士もあげる如く、「色」の中に「睡眠」をふくむとする考へ方の如きは大住派所属のアッタサーリーニその他の論書に於て厳しく批判せられている如き、その一例である。

内容に就て述べれば、該論書は十三頌陀行に關している。中道の実践に立つて仏陀が苦行及び享樂の兩極端を避けて、簡素な生活を説こうとした。この根本的仏陀の意趣は最初期は七頌陀であったが、時代と学派の發展と同時に十二頌陀 (大乘) 或は十三頌陀 (パーリ仏教) となつて開示された。我々のテキストは数から言へば仏音のそれに應じた十三頌陀である。然し、その内容に於て相違が種々に見られる。例へば、該者の節量食 (patapāṇḍika) は仏音の清淨道論で言われる節量食とやや相違し、後者は鉢の中に入れた食物のみを食することに限られている。十三頌陀行は中国、日本では四分律行事鈔に説く如く、この場合は十二種であり、次第乞食が除かれている。然し、十二頌陀の場合、一揣食をあげる。この一揣食は十三頌陀中の節量食と内容を同じくする。頭陀の数及び内容の相違は、「ヒマラヤ・チベット・中国」という国土の相違と当時の慣習の相違によ

つて左右されることが多く、これを見ても国土・風習を異にした社会と僧団の生活様式の一部が理解出来て興味ある資料ともなるであらう。

元来、頭陀とは *dhunahi, to get rid of* の過去分詞形であるが、それは伝統的には「煩惱を捨てた状態」を意味しており頭陀支の支とは智或は行道の支分であると解釈せられている (*Vism, p. 61*)。然し、この解釈はチベット及び漢訳と両テキストと著しく相違していることが注意せられてよい。それは又英語では *purification* があつられる。因に宗教に於ける *purification* と *guilty* いう問題については、一九六四年九月アメリカで行われた国際宗教学界で共同討議にあげられた問題であった。この会は専門学者のみに限られた会合ではなかったとしても、そこで論ずるなら具体的な資料を出して発表すべきであらう。単なる思弁では充分な意味はない。この点で頭陀行を論究する専門学者の発表も欲しかった。私はこの会議に出席の代り、論項を提出し、*guilty* と *purification* にあたる梵巴語をあげて分析してキリスト教研究者への資料を提供しておいた。ともあれ、英語の *purification* を頭陀行にあてる上に於ても、キリスト教学者の先入見と区別するためにも仏教哲学の基盤を明白に把握しておくことが必要であらう。

ウパティッサの頭陀行の論究の仕方は独特の体系的仕方で見られる。これは単なる頭陀の羅列でなく、理解しつつ、現実生活に基付いて除々に実践せんとする意図を持っているからであり、又、実際に行ぜられていた僧団の生き方を示唆するものであらう。即ち、先づその目的をあげ、強いて十三支分の列挙、

説明の順に大分けし、更に各一について、その実践への誓い、利益、説明と理由という分類に準じて述べられている。全体に一貫していることは仏陀の言葉通りの頭陀行の踏襲ではなくして、頭陀の精神であるということである。従つて、特殊な場合に於ける除外例を大胆に認め、環境に適した実践をすすめようとしている点を看過すべきではない。

更に各種異本対照によつて、単なる読み方だけでなく、思想的に諸種の問題を提供する箇所が多い。例へば、糞掃衣の功德中、パーリで四衣とされているものが、チベットでは住処のみであり、漢訳では「博士は漢訳に相当箇処なし」といっているが「実は居士衣のみあげられている。しかしパーリの四衣（衣・食・住・薬）全部ではない。これについて、博士の指定する如く、当時、自由主義のマハーサンギカ或はマハーヤーニカの興隆にともない、四衣が行じ易く、ただ一つに簡素化されたということが更に詳しく客観的に論証されれば興味ある問題となるであらう。因に糞掃衣の *pamsukula* は「塵の塊り」の原義であるが、インドの慣習からしても、中国で意味する「不浄を拭う古紙」とか「不浄を掃う帚」という意味ではない。該論書はその裏づけをも与えている。

又、頭陀行と善・悪・無記という倫理的判断との関係について、博士は該論者所属の無畏山住派の見方を紹介する。即ち、この派は頭陀行を以て単に施設であつて道德的意味を意味しないとしているとする。これに対し、大住派にそれらを以て善か又は無記であるとしていることをも持摘している。

校訂本の体裁を述べれば、先づ、チベット原典、そのデバ

ナガリーによる transcription (これはローマナイズされた文字に慣れない、インドのパンデイト達のために書きかへたものと思われる)。左頁には英訳と内容分類、詳細な脚註、アペンディックス二章(ワシントン版についてと所引大乘経典の復元梵巴文)、チベタン・グロサリー、索引が附加されている。その英訳は確かであり、パリー文献の權威たる博士のその方面との比較研究は該論書の思想的意味を一層浮き彫りしている。ただ異本校訂上、考慮の望まれる箇処が若干見られる。次の一例をあげれば充分であろう。即ち、二八頁 rig par は reg par を取る方がよからう。この語は sparsavihāra (phaṣavihāra) にあたる。因にラサ及び北京版は reg par にして、ナルタン版とネパール発見のものがそれぞれ rig と rigs par とである。

要するに、該論書は簡素な頭陀行に関するものではあるが、パリー・チベット・漢訳との文献交渉、又、思想の相違さへ露呈する異本の意味、社会的歴史的背景への手がかりを与へる諸点に於て、学界にもたらす意味は極めて多く、各分野から利用し得べき珍書たるを疑はない。なほ、私は博士との申合せで、パリー文献との比較研究の部門を担当し、拙著「ウパティッサ解脱道論」の中で詳しく記録しておいた。博士と私の校訂本と二つ相補つて原典資料の分野で役に立てば幸甚である。

## 大谷学報 第四十五卷 第一号

集合意識の存在構造……………中 久 郎

プラマーナ・ミーマーンサーの研究……………長 崎 法 潤

時機 相 応……………松 井 憲 一

インドに於ける東洋学研究……………佐々木現順